

岩手県東磐井郡の農業と季節出稼ぎ

及 川 喜久子

I はじめに

戦前から供出県としてあった岩手県の出稼ぎも、昭和49年以来の不況と高度経済成長から安定成長への転換期にあたって、大きな転機を迎えようとしている。そこで、本稿では、岩手県においても3番目に出稼ぎの多い東磐井郡をとりあげ、最近の農業から出稼ぎの動向と、それを押し出している要因を、農業の地域的特性から考察を試みた。出稼ぎの定義は、川本忠平と行政側の『生活の本拠である自家経済と直接つながりのある1年未満の回帰的移動』を用いた。

II 地域概観

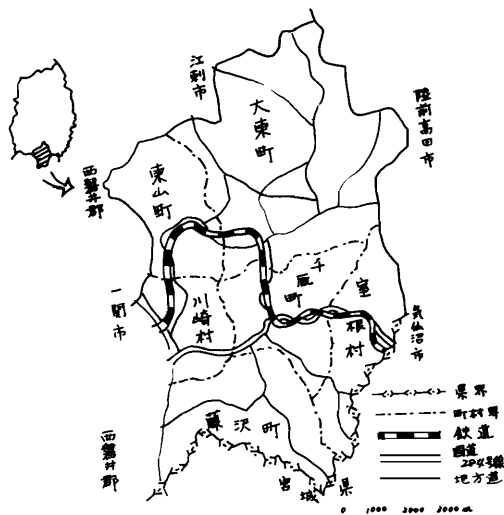
1) 位置・地勢・気候

東磐井郡は、岩手県南端に位置し、面積771.6Km²、人口76,120人で、第1図のような4町2村よりなり、地勢は、北上山系に介在する山間丘陵地帯で、耕地はその間を縫って散在あるいは小団地を形成しているが、その多くは傾斜地が階段的耕地で、耕地率12.8%で、土地ならびに労働生産性は低く、主な河川流域に若干の平坦地がある程度である。比較的温暖な気候で、冬期間の積雪も少なく、昭和48年調べでは、最深25cmである。

2) 農 業

東磐井郡の農業の特性は、県平均に比べて、農業への依存度が高いにもかかわらず、限られた土地条件の中で経営規模も小さく、農業経営を維持するために、水稻・たばこ・畜産を主要作物として多角的複合経営を行っている、ということができ、そのみでは生活は容易ではないので、現金獲得のために兼業強化の方向をたどっていき、男子は出稼ぎや人夫・日雇いに出る者が年々増加している。なお、町村別には、それほど目立つ差はない。

第1図 岩手県東磐井郡全図



III 出稼ぎの動向

昭和40年と47年の農業基本調査に付随

して、出稼ぎ関係の項目について調べているので、それを比較することによって動向をとらえていくと、兼業種類別にみた場合、第2図のようであり、出稼ぎが昭和35～40年の間に急激に増加しており、その後も増加傾向を示している。これとは逆に、自営業は減少の一途をたどっている。

第2図 兼業種類別農家の動向

	恒常的職員	恒常的賃労働	出せかぎ	人夫・日雇い	自営業	
昭35	18%	1%	6%	22%	37%	6,654戸
40	17	12	22	31	18	7,999
45	16	19	25	28	12	9,366
49	44		22	24	10	9,707

第1表 町村別出稼ぎ（昭和49年）

	農家数 (A)	出稼農家数 (B)	農業従事者数 (C)	出稼者数 (D)	出稼農家率 $(\frac{B}{A}) \times 100$	出稼者率 $(\frac{D}{C}) \times 100$
大東町	3,537	921	12,625	1,220	26.0	9.7
藤沢町	2,092	541	7,733	747	25.9	9.7
千厩町	1,952	287	7,439	422	14.7	5.7
東山町	1,189	134	4,567	219	11.3	4.8
室根村	1,252	152	4,650	223	12.1	4.8
川崎村	943	118	3,507	161	12.5	4.6

町村別にみると、第1表のようになり、他の町村に比べて大東町と藤沢町からの出稼ぎが多い。

経営規模別には、昭和40、47年とも50～149a規模からの出稼ぎが過半数を占め、同規模農家3戸に1人の割合で出かけており、徐々に150a以上の経営規模農家にまで拡大していている。次に続柄・年令別では、昭和40年は、20代のあつぎの出稼ぎが、世帯主のそれよりも上回っていたが、47年になると40代の世帯主からの出稼ぎが多くなり、老令化する傾向もある。また、出稼ぎの理由は、「生活費補充のため」が圧倒的で、余剰労働力解消の出稼ぎ、というケースはほとんどなくなり、営農資金、借金返済等々の資金ぐりが多く、就労期間も3～6カ月未満へ集約されてきており、一方で9カ月以上の出稼ぎ就労者も増え、長期化の様相も呈している。就労地域は関

東方面が圧倒的で、そのほとんどが土木建築であり、出稼ぎ労働が、単純肉体労働者を中心として構成されていることや労働力需要の大きさを物語っている。仕送りは10～20万円が最も多かった。

今年の場合、昭和49年1～3月にかけてのオイルショック以来の不況で、求人数が昨年の半数しかなく、就労しても、基本給は昨年並みだが、時間外労働がないので実質賃金は下がるらしく、職業安定所を通さず、縁故就労等々の経路をとっていた出稼ぎ者にとっても、求人が少なくなっている。

IV 季節出稼ぎの要因

地域の農業より

出稼ぎの要因を考える場合、様々の面からの考察を試みなければならないが、本稿では3点に視点をあて、農家からの聞き取り等を手がかりに考えてみたい。

1) 自営業の減少との関係

第2図より出稼ぎの急増と自営業の減少が時を同じくしていたが、これは、自営業の主体であった製薪炭を営む農家が、神武景気の影響で木炭からプロパンガスへ、という燃料の変化に伴い、薪炭業をやめて、出稼ぎや人夫・日雇い等に収入源を求めて転向していったものと思われ、51戸について動向を調査した結果、中止後、自営農業をしているもの12戸、出稼ぎに行っているもの39戸となっている。

2) 主要作目の面より

農事暦より主要作目中、畜産をのぞく、水稻・たばこ耕作農家は、約3カ月の出稼ぎ可能の期間がある。農家にとって最も大きい換金作物である米は、昭和45年以降の、目標以上の達成率を示している生産調整の影響から、作付面積も、粗収益も減少してきている。が、農家でもいろいろ自衛しており、直接、出稼ぎとの関連はないようである。しかし、農業生産意欲の減退、基幹労働者の兼業化促進に少なからぬ影響を与えていると思われる。諸経費をさしひいた1反当たりの米の実収益は約4万円である。ただし、この中に家族労働に関する人件費は含まれていない。

次に、葉たばこ栽培は、慶長年間よりの古い歴史を持っており、年々、生産量・粗生産額が増加していつているのに対し、耕作人員、作付面積は昭和40年を境に減少の一途をたどっている。これは、省力的な栽培と労働生産性を高めるため、経営規模拡大、近代的設備導入が奨励され、品種もそれにみあったものに転換されたが、乾燥施設を整えることが必要となった。が、葉たばこからの実収益は、家族労働を含まずに計算して、1反当り約10万円である。

以上のことより、農家からの収入はある程度決まっている上に諸経費の値上がりが著しく、収穫

や売り渡しが終わると、12月頃より前記の理由で、出稼ぎに出かけている。

3) 農作業の省力化 機械化について

機械化によって、10a当りの労働時間は87.1時間と35年当時より半分も少なくなっており、経費試算においても手植より有利となる。機械化による作業の省力化とその代金返済が出稼ぎの背景となっていることはよく言われることであるが、東磐井郡の場合もやはり大きく、機械は1.5ha以上規模だけでなく、下層にも徐々に普及されてきている。しかし、まだまだ個人所有が圧倒的であるため負担が大きい。

町村別の出稼ぎでは、大東・藤沢町から、郡内の出稼ぎの約70%を出していることがわかったが、その地域差を出している要因に交通面が影響しているように思われる。しかし、詳細は不明で、今後の課題として残った。

V ま と め

これまで述べてきたような農業構造を背景として出稼ぎは増加傾向を続け、一家の大黒柱たる30～40代の世帯主が出稼ぎの中心となり、老令化、長期化の様相も呈してきている。現在、町村ごとに、農地の交換分合や作付作物の団地化の計画や、工場団地を造成しての工場の誘致が進められている。

1年出稼ぎすれば、生活設計がその収入を含めたものになってしまう、というのも出稼ぎである。出稼ぎという不自然な就労形態解消には、まずもって自営農業のできる態勢を整えることが急務で、出稼ぎ者にとって岐路に立たされていると言える現在、また、農業基本法改正が検討されることになった現在、早計かもしれぬが、食糧生産としての農業を重視した国家的な一貫した農政と、農家の、農業における長い目で勉強が必要であるように、聞き取り等を通じ感じられた。

最後に、本稿を作成するにあたって御助言、御指導をいただきました横山先生に深く感謝いたします。

参 考 文 献

- ・出 稼 ぎ 農村はどこへ行く
美土路達雄著 日経新書
- ・ドキュメント・出かせぎ
梅原愛雄著 岩手日報社

- ・ 東北の出稼ぎ 川本忠平 日本地誌ゼミナールⅡ
- ・ レポート 青森県における出稼ぎ問題
小林時三郎 東北開発研究 Vol.4 No.2 東北経済開発センター
- ・ レポート 青森県における出稼ぎ労働者
柳川 昇・小林時三郎 東北開発研究 Vol.5 No.3
東北経済開発センター
- ・ 青森県の出稼ぎについて
竹山幸次・富岡敏雄・芳賀節夫 弘大地理 Vol.4 1968
- ・ 東磐井地方の農業の展望 昭和49年3月
東北農政局岩手統計情報事務所千厩出張所編
- ・ 岩手県統計年鑑
- ・ そ の 他